

二二八事件に散った大茶商 王添灯とその一族 (2)



須賀 努 (コラムニスト／茶旅人)

王添灯の長男 王政統と茶業

王添灯の長男、王政統は1926年台北で生まれた。中学卒業後、台北高校へ進学するはずが、父親の勧めで、1943年満州の旅順高校で学ぶことになる。これは大連に文山茶行の支店があり、添灯の弟、進益がいたこと、そして何より中国での商売を考えてのことだったに違いない。



若き日の王政統氏

だが1945年日本の敗戦前後に、大連、旅順にもソ連兵がなだれ込んでくる。危機の中で様子を見ていた政統は、翌年大連から瀋陽、秦皇島を経て天津へ脱出する。その際、自らを日本人ではなく台湾人だと証明するものが必要だった（日本人だと危険）が、その証明を発行したのは、大連同郷会理事長の孟天成だった。孟は医者だが、大連では一番成功した台湾人の一人と言われており、今も南山地区にその住まいが保存されている。



大連 孟天成旧居

因みに当時大連には約300人の台湾人がいた。終戦により、日本人から台湾人にその地位が変わったが、極めて曖昧なものだった。日本時代、日本などで学んだ台湾人の多くが満州へ渡っている。それは台湾に戻っても、日本に残っても、日本人と同等の待遇は得られないが、満州ではそれが得られたからだと言われている。

『満州に渡った台湾人の戦後』は極めて興味深い歴史だが、資料は殆ど残されていない。その理由は国民党が台湾にやってきたことにより、大陸から戻った台湾人を国民党のスパイと見る向きもあり、また一方国民党の中には彼らを共産党と繋がっているとみていたこともあって、長い間彼らは沈黙を余儀なくされた。

政統は天津から上海を経由して、基隆に船で到着している。この時、誰が島へ帰る船を手配してくれたのか。天津には同郷会会長の呉三連（後の初代台北市長）、上海には楊肇嘉がいた。二人は共に台湾民主化運動の同士であり、王添灯と関係のある人物だったというのもまた興味深い。

帰国を果たした政統だが、母親は既にマラリア

で亡くなっていた。更に台湾大学化工系に入学するとすぐに二二八事件が起こり、父親をも失ってしまう。実は政統はこの時、父の命令により、茶商の香港視察団に入り上海に行っていた。もし事件直後台北に居れば、彼も拘束されたことは間違いない。上海から台湾に戻ったのはかなり後だったようだ。

その後は既に王美恵が回顧している通り、若いながら王家の当主として、様々な仕事を行い、西門町に3階建ての家（建物は現存）を買って引っ越し、鳴りを潜めていた。茶業を行うのは、余りに目立ちすぎた。元々アメリカ留学の準備をしていたが、それも果たせなかった。

1960年頃になると、天祥行という名で茶業を再開した。当時台湾茶の輸出が最盛期を迎え、語学にも堪能で、海外経験もある、海外貿易ビジネスのできる人材として、重宝されたという。製茶公会の資料によると、王政統は1978-87年まで、3期9年、常務理事を務め、台湾茶の輸出に大いに貢献した。



王美恵女史と張氏（中央）

王美恵の夫、張氏によれば『政統はアフリカ向け緑茶輸出の台湾代表を務めていたこともあった』という。天祥行は台湾茶の輸出が止まった1980年以降はスリランカ紅茶などを輸入して台

湾内で販売していた。政統自身は2006年に最終的に店を閉じて、アメリカに渡り、2010年にその生涯を閉じた。

因みに張氏（1929年生まれ）は台南一中を主席卒業した秀才。二二八後の白色テロで、同級生の疑いに連座して7人が投獄され、唯一生き残ったという。

その後鉄鋼関係の職に就くが、大阪の展示会に出席しようとしても、出国が許されず、パスポートも発給されない状態が続いたが（最終的に保証人2人を立て、絶対に政府に悪口を言わない条件で出国）、その後多くの台湾人がアメリカ移住した時期、1986年張氏一家もアメリカに渡り、ロサンジェルスで暮らした。

2000年に台湾に戻り、2006年に政統が経営していた天祥行を閉める話があった時、工場と従業員を引き継ぎ、畑違いの紅茶の輸入販売を行う新天祥国際という会社を設立。台湾内のティバッグ原料の多くを配給している。茶葉の多くはベトナムやケニアからの輸入、90歳となった今日でも茶業を続けている。

製茶公会顧問の黄正敏氏は『王政統氏は茶業の先輩であり、恩人だ』と話す。1970年代黄氏の父が亡くなり、茶業界内でも若手の黄氏には荷が重い、とかなり言われていた時期、唯一政統だけが味方となり、様々なアドバイスをくれたのだという。『政統さんは怒りっぽいところもあったが、大学の先輩ということもあり、非常に可愛がってくれ、モロッコ向け緑茶も日本向け煎茶もその輸出事業を一緒にやった』と回想する。そして政統がアメリカで亡くなった話になると、黄氏は一瞬涙をこらえ、その繋がりの深さが見て取れた。

因みに添灯の次男、王英明（1936-1992年）も、淡江大学法文系を優秀な成績で卒業したが、海外留学のための出国は認められず、生涯中学教師で終わった。彼もまた二二八事件の犠牲者の一人だ。

父王添灯の思い出について政統は『殆どゆっく

り話し合う時間もなかった。身長 168cm、体重僅か 40kg の鶴のような体形だった』といい、『旅順から戻って、台北で貧しい子供が多くてショックを受けた。自分の父がそういう庶民の側に立って議員活動をしている姿を自慢に思った』とインタビューで述べている。政統は、口は悪いが、心の優しい人物だったと思われる。

大連文山茶行と王進益

添灯のすぐ下の弟、三男の王進益は 1903 年生まれ。1921 年から 5 年間の学校教員生活を経て日本に留学。日本大学経済科で学んだ。その時よく会っていた人の中には後の台北市長、呉三連などもいたという。



王進益氏（台北市茶商工会資料より）

1934 年に文山茶行大連支店に妹の秀琴夫妻と共に派遣された。進益も添灯と同様、反日運動に身を置き、自ら雑誌社を立ち上げ、2-3 度警察に拘留されていたようだ。恐らくはそれを見た兄弟たちが危険を察知して、彼を大連に向かわせたのではないかと、勝手に想像している。

当時大連は日露戦争後に日本が租借しており、

既に日本人が多く住んでいたが、文山茶行の支店開設はちょうど中国東北地方に満州国が建国される時期に当たっている。日本人は日本茶（煎茶など）を好み、台湾茶は売れなかった。文山茶行は台湾から包種茶や花茶を持ち込んで商売を始め、満州人に販路を開拓していくことになる。



大連文山茶行の店舗跡付近

1937 年日中戦争が勃発し、浙江省や福建省から東北部への中国茶移送ルートは途絶えてしまう。これを好機に商売を伸ばすも、今度は日本による物資統制がここにも及び、台湾茶の輸入も難しくなり、進益は途方に暮れてしまった。だがちょうど日本大学の同級生に出会い、彼の口利きで、商売が続けられたと、述懐している。1942 年文山茶行は台湾茶商の中で、三井などに続き、華北での売り上げ第 3 位となり、大茶商の仲間入りをしている。太平洋戦争の戦況は厳しくなると、台湾での商売も難しくなり、1943 年頃には在庫の茶葉全てを大連、天津に送り、台湾の文山茶行は休業したというから、満州が最後の砦だったということだろう。

1945 年 8 月ソ連が侵攻して茶業が止っても、進益たちは台湾に帰ることも出来ず、大連に留まっていた。商売は再開したが、匪賊が横行して、茶葉を持っていかれることもあったという。その

後一家は天津に移り二二八事件の時も家族からその知らせを聞いただけで何もできなかった。

台湾に戻ると、兄水柳が文山茶行を引き継ぎ経営していた。1949年の茶商公会名簿を見ると、水柳は文山茶行董事長兼茶商公会理事の職にあり、進益も綿長産業の総経理として名前が記されている。ただこの会社は文山茶行と住所も同じ、綿長は父親の名前であることから、取り敢えず兄が計らって作った会社ではないかと思う。

1951年にはちょうど声が掛かった台湾区茶輸出公会で総幹事を勤めることになった。1965年の台湾茶輸出100周年時の輸出公会の理事監事合同写真には、理事である王政統の横に、進益も一緒に写っている。1954年から67年まで『茶事通信』を独自に作り、茶業者に情報提供を行うなど台湾茶業に貢献していた。

1970年から台北市茶商公会の総幹事を1999年(96歳)まで務めた。その間、茶商公会及び台湾茶業の歴史を整理・研究するなど大きな功績があった。退職後も顧問として毎日のように出勤、90歳を過ぎてもバイクで来ていたというから、健康であったようだ。最後は105歳で大往生を遂げた。

王進益の長男、王光世からも話を聞く機会があった。1934年生まれてすぐに父に連れられて大連に渡り、幼少期を過ごす。『伏見国民学校に通い、同級生の殆どは日本人だった。当時文山茶行はかなり大きな商いをしており、小売りはなく、全て卸しだった。商売相手は日本人ではなく、満州人。彼らは常に茶を飲んでおり、安くて茶の色が付いていればよい、安い茶葉に花を入れて蒸す、という品質のものが大半だった』と流ちょうな日本語で回顧する。



王進益長男 王光世氏

父進益に連れられて移った天津は混乱期で『茶葉も売っていたが、水が悪かったのか、沸かした湯を買いに来る人が多かった』ことを記憶している。場所は針市街という市場にあり、近くには包子で有名な狸不理などがあった。



天津 王進益、光世居住地跡

王添灯の像

実は今回の王添灯関連の調査では、孫(添灯長女 王純純の娘)に当たる黄秀婉さん(1954年生まれ)に親族を何人もご紹介頂き、大変お世話になった。初めて彼女と会った場所は、二二八記念公園内に作られている、二二八記念館(日本時代

の气象台)だった。ここは勿論二二八事件に関する資料が数多く展示されているが、その中でも王添灯関連の展示が多く、かつ入り口付近に、王添灯の銅像が飾られているのが目を惹く。



台北 二二八事件記念館 王添灯像 (黄秀婉さん夫妻と)

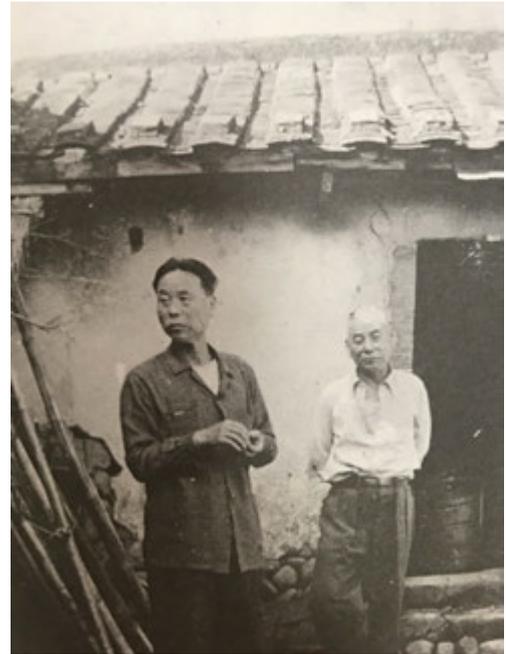
黄は王添灯については勿論、王家及び父方の歴史にも非常に興味を持ち、発掘などの活動を積極的に行っており、この記念館設立でも色々と支援したという。彼女によれば、『王添灯の新店生家(太平宮近くの四合院)はまだあるが、人は住んでおらず、整理が全くされていない』といい、『昔文山茶行のあった貴徳街の家は既に建て替わっていて、往時の偲ぶものは何もない』ともいう。

尚黄秀婉の父方の祖父は黄鐵。辰馬商会の丁稚からたたき上げ、当時の台湾亀甲萬販売会社の社長になった人物。光復後亀甲萬からの輸入が途絶え、新たに呉氏と萬家香を設立し、その後呉氏に会社を引き渡し、やはり日本とゆかりの深い人物であった。

二二八事件後も茶業を続けた王水柳

話の流れで最後になってしまったが、添灯の長

兄、王水柳についても触れておかなければならない。水柳は添灯より3つ年上、下の弟進益と共に三兄弟で、公学校に通っており、卒業後は父親と共に家業の茶業に従事する。



王水柳 (右) と王進益 実家前で

1932年に添灯ら家族で文山茶行を設立し、製茶を担当、肩書も長兄から社長となっている。基本的に對外活動は販売担当で弁も立つ添灯が行い、目立っていたはずだが、茶商公会資料を見ると、水柳も1937年に満州(大連)にて開催された台湾茶展示会に公会会長陳天来らと参加していたことが名簿から見られる。

水柳の長女、王淑恵は当時の様子を『叔父(王添灯)は非常に才覚がある商人だったが、それ以上に政治家だった。文山茶行が設立された時は、叔父の力が大きく発揮され、王家を中心に50家、10株主で構成されていたが、二二八事件後は、皆逃げ出してしまった』と語っている。



王淑恵女史

二二八事件後、行方不明となった弟を探し求めて各所に出向き、手紙を書いたが、一方で家業を守ることも重要な任務になっていたはずである。淑恵によれば、『父は文山茶行を完全に引き継ぎ、従来から担当していた製茶を続けていた。王有記3代目も製茶を習いに来ていたほど、技術はしっかりしていた。因みに現在有記銘茶の奥にある焙煎設備は文山茶行とそっくりだ』という。

『同時に添灯が抜けた穴を埋め、取引対応などにも奔走した。香港堯陽茶行の台湾代理（買付など）も担当していたし、50年代にはアフリカ向けの珠茶の製造・輸出もしていた。だが茶業が変化していき、1964年に店舗を閉鎖。加工は続けていたが、1973年までにほぼ輸出がダメになり茶行の歴史に幕を下ろした』と話す。

日本時代から改組された台北市茶商公会では1949年設立の年から1976年の改選まで、常に理事以上に名前があり、1960-63年の3年間、理事長職にも就任して、活発に活動していた様子が見える。一方新しくできた製茶公会にも参加し、理事を1956年から1期2年、1961年から2期4年勤めているが、肩書は『文山茶行精製廠廠主』となっている。

水柳と意外な繋がりのある人物を見つけた。先日100歳で亡くなった台湾独立運動家の史明とは親戚関係に当たるという。史明の外祖母の弟の娘

が水柳に嫁いだ寒梅だったのだ。しかも戦後中国大陸から台湾に戻ろうとした史明は、青島まで辿り着くが金を使い果たしており、『青島の台湾茶商を頼り、そこから台北の水柳に連絡を入れてもらい、4日後祖母より資金が送られてきた。その金を使って基隆行きの船賃を払った』と『史明 回憶録』の中で回顧している。これを見る限り、青島にも台湾茶商が何軒もあったことが分かるのも興味深い。

また日本に亡命し、台湾にいる家族との連絡が絶たれた史明に対して、『(水柳は) 1950、60年代、茶業で日本を訪れた際は、危険を冒して会いに来てくれ、祖母の伝言をくれた』といい、1993年に台湾に戻った時、既に水柳は亡くなっていたが、その長女、恵子（王淑恵）とはその後も行き来している』と述べており、かなり近い関係にあったことを窺わせる。茶貿易と伝言、何とも時代を感じさせるエピソードだ。

新店と言えば、先日1つの廟の名前が出てきていたので行って見る。太平宮は思ったより大きな、立派な廟だった。3階まで登るとかなりの景色が見える。建物自体は建て替えられているが、最初の廟は200年ぐらい前に漳州から渡って来た人々が建立したらしい。

実はここは王添灯の生まれ故郷に近い。そして説明文を読んでいくと、この廟の管理を光復後長い間行っていたのが、水柳だと書かれている。王家にゆかりの廟なのだ。この規模からして、茶業で儲けた資金でここの管理をしていたのだろう。

最後に『文山茶行大連では六合香という包種茶と花茶を合わせた茶が売っていた』と聞いていた。王淑恵は茶業とは無縁であったが、数年前に文山茶行の茶、『六合香』を復活させ、販売を開始した。台湾包種茶はそのままでは満州人の口には味が合わず、水柳が中心となって改良した産品だったという。台湾茶業にその名を刻んだ王一族に思いを馳せながら、その茶を飲ませてもらうと、ほのかに北方の味がした。